

# The Fundamental Study to Find Factors Related in Students' Satisfaction with Campus Life.

Kaoru Tanida\*

The purpose of this study is to find factors that relate to students' satisfaction with their campus life. The variables used in this study were drawn from survey data which has been conducted since 1976 by Institute for Integrated Communication Research and Developments at Kwansei Gakuin University. The survey involved was conducted in a study every 2 or 3 years and has been done 13 times. One fifth of the total population of undergraduate students was sampled for each survey. The total population surveyed was 38,487 and 15,235 students responded, (averaged collection rate was 39.5 %).

Twenty two variables (evaluated satisfaction, five variables evaluating importance of students' activities, three subscale scores from Pace's CUES (College and University Environment Scales), a psychological maladjustment score, a classroom attendance rate, evaluated efficiency of higher education, five types of motive for entering university, and five types of reason for being a student) were picked from the surveys and put into a correlation study. The correlation study revealed that satisfaction significantly correlated with two activities; "lecture" and "after school job"; and classroom attendance rate, evaluated efficiency, and two types of motive for entrance; "taking -advantage-to-get-job" and "enjoying-ones-youthful-days". "Enjoying-ones-youthful-days" was negatively correlated with satisfaction.

Ten averaged variables were compared between five evaluated satisfaction groups as, "very-satisfied", "almost-satisfied", "kind of-satisfied", "not that much-satisfied", "not at all-satisfied". As a result of one way ANOVA, all of the averaged variables except evaluated importance of activity for "after school job" had been shown in main effect. Farther comparison showed that in evaluated importance of activity was significantly different between all satisfaction groups except between "very" and "almost", higher satisfied group evaluated higher importance for each activity. Evaluated efficiency of higher education is significantly different between each group, the higher satisfied group evaluated efficiency of their education in university higher. The psychological maladjustment score is significantly different between satisfied groups, higher satisfied group has a lower score on psychological maladjustment. All three subscale scores from CUES are significantly different between satisfaction groups in each subscale score except between "not that much-satisfied" group and "not at all satisfied" group in subscale score of "Scholarship".

The evaluated satisfaction score was compared between five demographic attributes; faculty, scholastic year, sex, living with family or not, involved in club activity or not; in each survey. The involved in club activity group evaluated their satisfaction with campus life significantly higher than that of the not involved in club activity group on every survey. Also sex differences are significant in every survey except the first survey in 1976 and the second survey in 1979. Women evaluated their satisfaction higher than men. Senior and junior groups tended to evaluate their satisfaction higher than freshman and sophomore groups. Such scholastic year differences were shown from the first survey in 1967 to the 5th survey in 1986, and from the 7th survey in 1990 to the 11th survey in 2000. There were no differences in nearest preceding survey in 2002 and 2004.

---

\*Laboratory Technician, Institute for Integrated Communication Research and Development, Kwansei Gakuin University

# 大学生の学生生活充実度に関する要因モデル作成のための基礎分析

—関西学院大学 カレッジ・コミュニティ調査資料を用いて—

## 1. 問題

カレッジ・コミュニティ調査（以下 CCA 調査）は、関西学院大学総合教育研究室の研究プロジェクトチームによって、1976 年の 11 月に第 1 回調査が実施され、以来 2004 年の第 13 回調査まで、28 年間に渡って継続されてきた学生の生活実態と価値観に関する調査である。この調査は、「大学のもつ諸要因の解析をめざし、更に、変動する大学の実態に対処しうる大学システムのあり方を考える。」という事を大目標とし、「学生と本学の教育環境との相互作用の実態を明らかにする。」事を個々の調査の目的として 2005 年度までに、13 回分の基本報告書の刊行が行われてきた。この調査の質問紙は、学生生活の実態、大学生活における目的意識、人生における価値観のあり方、大学生活における心理的不適応状態などといった継続されてきたいくつかの項目と調査回毎の研究員の関心などによる“トピック項目”から構成される第 I 部と、大学環境認知尺度、100 問（第 3 回から 60 問）の II 部とに分かれている。さらにこれらに、回答者属性として、学部、学年、性別、住居形態、通学所要時間、クラブ・サークルへの参加の有無、参加団体の種類・活動内容、1 ヶ月の平均支出などが加わる。

さて、この調査が開始されて 30 年近い歳月が経つ。この間本学では、1995 年度には神戸三田キャンパスに総合政策学部が加わり、さらに 2001 年度には理学部が神戸三田キャンパスに移転し理工学部へと改組されるといった変化があり学生数も増加してきた。既存の学部でもカリキュラムの改定、学科の再編など教育に関するシステムも変化を続けてきている。また、入試制度も AO 入試や、F 日程入試、スポーツ推薦や指定校推薦の導入など入試形態も多様化してきている。これら大学における改革のみではなく、初中等教育のカリキュラムもこの 30 年間に何度か改定されており、この初中等教育における変化も本調査における学生の行動に影響を及ぼしているかもしれない。社会的には、1992 年来不況に突入し抜け出せないまますでに十数年が経ち、この長引く経済不況によって、雇用形態や産業構造といった社会の根幹も変容を続けている。このような変化を受けて、年間の自殺者が 3 万人を超えるなど、社会に漠然とした不安感が漂っている。特にこのような社会の変化は、学生の行動と価値観に大きく影響を与えていると予測される。

本調査において、これらの社会的要因も考慮に入れた時系列分析が必要な時期に来ていると思われる。

また、一方で大学進学率の増大は、すでに 2 人に 1 人が大学へ進学するという現象を生み出し、“何となく” “みんなが行くから” などといった理由での進学者が増えていると考えられる。このような学生はおそらく、不適応を起こしやすく、心理的な問題や学業的な問題を抱えやすいと予測される。このような学生に対処する必要がある一方で、より充実した学生生活を送るための要因を探り適切な施策をするためにも、「充実度」と「不適応」の 2 軸で学生行動をモデル化することは意義のあることであろう。「学生生活の充実度」というのは、学生の大学における公的生活と私的生活の総合的な評価として重要な指標であり、この充実度の予測モデルを構築する事はこれからの大学教育の方向性を探る上にも有用である。しかし、社会・経済的な時系列的要因を入れ込む前に、モデル要因となりうる継続項目間の共変関係に関する基礎的な研究が必要である。本研究の目的は、充実度モデル作成のための基礎的分析をする事である。そのために、以下の 3 つの方法を用いて、変量間の共変関係を調べると共に、「充実度」を軸とした基本属性等との関連を調べる。

- ①継続されてきた項目について 30 年間の変遷を概観する。
- ②継続項目間の共変関係を相関分析によって調べ、全体としての学生の行動変動要因を調べる。
- ③「学生生活の充実度」を軸とした分析を試み、諸属性・継続項目と充実度の関係を調べる。

## 2. 方法

第 1 回調査から 13 回調査まで、基本報告書を基に得られた調査の概要を表 1 に示す。調査は、ほぼ 2～3 年度毎に実施されてきた。サンプリングはすべて、調査年度の在学学生数の 5 分の 1 である。第 1 回と 2 回の調査では、対象学生に日時と場所を指定し教室へ来てもらい集団で質問票を記入するという、集合調査が行われた。この 2 回だけが他の調査回に比べて目立って回収率が低いのはこのためである。また、第 1 回から 4 回目までの調査は、学籍番号を記入する記名調査となっている。第 3

表1. カレッジ・コミュニティ調査の概要

	1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回	8回	9回	10回	11回	12回	13回	合計
調査年度	1976	1979	1982	1984	1986	1988	1990	1992	1995	1998	2000	2002	2004	
調査時期	76.11	79.10	82.10	84.10	86.10	88.10	91.01	93.02	96.02	99.01	01.02	03.2	04.11	
全学生数	13942	13480	13757	14140	13595	13699	14010	14401	15481	16311	16892	17400	17617	
サンプル数	2651	2598	2759	2826	2720	2722	2783	2859	3062	3220	3331	3432	3524	38487
回収数	613	451	1250	1233	1195	1163	1417	1280	1649	1445	1314	1206	1019	15235
回収率	22.0	17.4	45.3	43.6	43.9	42.7	51.1	44.8	53.9	44.9	39.4	35.1	28.9	39.5
(データ数)	871	524	1457	1763	1196	1164	1425	1280	1649	1445	1314	1206	1019	16313
調査方法	集合調査 ・記名	集合調査 ・記名	郵送 記名	郵送 記名	郵送 無記名	郵送 無記名	郵送 無記名	郵送 無記名	郵送 無記名	郵送 無記名	郵送 無記名	郵送 無記名	郵送 無記名	

回以降は郵送による調査であり、3、4回の回収率は無記名調査となった5回以降とほとんど変わらないので、記名調査による偏りはないと思われる（付表1）。

第1回から4回にかけては、学生の年度変化を見るために5分の1サンプリング以外にも10分の1のサンプリングや、4年生については再度サンプリングを行わず前回調査の1年生のサンプルを使用するなど、やや変則的なサンプリングが行われている。本研究では、これら再調査用に予備に収集されたデータも使用する。表1の「データ数」にあたるサンプルデータである。よって、本研究におけるそれぞれの平均値、サンプル数等は刊行されている「カレッジ・コミュニティ調査基本報告書」とは異なる。

本研究では、13回にわたるカレッジ・コミュニティ調査のなかで継続されてきた以下の8つの項目について概観する。

- 1) 学生生活の充実度
- 2) 登録と出席（出席率）
- 3) 諸活動の重要度評定
- 4) 重視している集団の種類
- 5) 大学進学動機：入学時と現在（5類型）
- 6) 心理的不適応得点
- 7) 在学に対する有用度評定
- 8) 環境認知尺度（CUES）（3領域点）

それぞれの項目の内容と関連研究に用いた変量の概要は、以下の通りである。

- 1) 学生生活の充実度については、1988年度の第6回調査までは「あなたの今の大学生活は…」と表記され、1990年度の第7回調査から「…学生生活…」に変更された。「全然充実していない」～「非常に充実している」を1～5点としその平均を使用し（付表2）他の変量との相関係数をもとめた。

- 2) 登録と出席は、登録講時数と実際の出席講時数についての回答を使用した。回答が20講時を超えるもの、出席講時数が登録講時数より大きいものについては欠損値として処理した。出席講時数を登録講時数で割った数字をそれぞれの出席率とし調査回ごとの平均を求めた（付表3）。関連研究には各調査回の出席率の平均を用いた。

- 3) 諸活動の重要度評定は、「ゼミ」「語学の授業」「普通の講義」「クラブ・サークル」「アルバイト」の5つについて、「少しも重視していない」～「非常に重視している」を1～5点とし平均値を利用した。2002年度の第12回調査までは「非該当」の選択が無かったが、13回調査から「非該当」を設け、平均の際の分母から除いた（付表2）。また、図3に示すように1990年度の第7回調査において、学業活動である「ゼミ」「語学」「講義」3つの重要度評定値が大きく落ち込んでいる。これは調査票のミスプリントが原因と思われる。設問では、「以下の活動をどれくらい重視していますか」とたずねているのに対して、選択肢が「全然充実していない」～「非常に充実している」と表記されている。この項目の相関分析については、前後の第6回と8回の平均値の平均で補完した値（図中の白抜きのお〇□△にあたる）を用いる事とする。

- 4) 重視している集団の種類は、現在大切だと感じている関係について、その他を含む9つの選択肢から順位をつけずに2つ選択するものである。2つを合わせた選択率をしめす。なおこの項目の変数は相関分析には用いない。

- 5) 大学進学動機（入学時と現在）は、大学に進学しようと思った理由について重視した順に15の選択肢から3つ選択するものである。これに続く質問で

は、「では現在重視している事は何ですか」とたずね、同じ選択肢を用いて順位をつけて3つ選択してもらっている。「現在の理由」については第2回調査から設定された。この15の選択肢を内容によって以下の5つに類型化した。そのうち1番重視とされた類型の各調査回の選択率を相関分析に用いた(付表4)。

- a) 教養型:「教養や視野の拡大」「立派な人格形成」
- b) 勉学型:「専門知識・技術の習得」「学問研究」
- c) 学歴型:「就職に有利」「就職に必要な勉強をする」「将来の安定した生活」「結婚に有利」
- d) 青春型:「青春を楽しむ」「課外活動に励む」
- e) 雷同型:「皆が行くから」「家族がすすめる」「先生がすすめる」「特に理由はない」

基本報告書の類型化では「特に理由はない」を「その他」に分類しているが、本研究ではこれを雷同型に分類した。

これらの進学動機、在学理由に影響を及ぼすと考えられる要因に大学進学率があげられる。よって、文部科学省のデータから調査年度の「日本の18才人口における高等教育進学率」を相関分析の変数として加える。

- 6) 心理的不適応得点これは、第2回調査以降継続して採用されている項目である。「特別な理由もなく時々学校を休みたくなる。」などの15の項目について「はい」「いいえ」の強制選択で回答する形式であり、得点範囲は0～15点である。得点が高いほど不適応度が高い事になる。この質問項目については、第2回調査の基本報告書、この変数を扱った第4回調査の2次分析の報告書(遠藤, 1987)にもこの質問項目が作成された経緯や出所が明らかにされておらず、標準化の手続きを踏まずに踏襲されてきた項目といえる。この項目の尺度としての信頼性係数 $\alpha$ は.70と十分なものではない。本研究では調査回ごとの平均を用いる(付表2)。
- 7) 在学に対する有用度評定は、第1回と2回の調査では「この大学の教育はあなたの将来に役立つと思いますか」とたずねている。3回以降は「この大学であなたの人生の一時期を過ごすことは、あなたの将来にとってどれくらい役立つと思いますか」と質問表現が変わっている。回答は一貫して、「ほとんど役立つまいだろう」「たいして役立つまいだろう」「いくらか役立つとおもう」「かなり役立つと思う」「大いに役立つと思う」の5件法であり、これらを1～5点に点数化しその平均を用いた(付表2)。
- 8) 環境認知尺度は、カリフォルニア大学のC. Robert

Paceによって、1963年に作成された「College and University Environment Scales: CUES」を、立教大学学生相談研究所・学生部が日本語に翻案したものである。これは元々、100問からなるもので、「実用性」「学究性」「共同性」「妥当性」「意識性」の5つの領域としてそれぞれ20の質問が割り当てられている。これらは、「学内の出来事については、すぐ知る事ができる。」というような短い文章に対して「はい」「いいえ」の強制選択を求めるものである。それぞれの得点範囲は0～20である。第3回調査以降はこのうち「実用性」「学究性」「共同性」の3領域60の質問が継続的に採用されてきた。これらの項目の翻訳と標準化の手続きの詳細は明らかではない。これら3つの領域項目の信頼性係数 $\alpha$ はそれぞれ0.64, 0.73, 0.73である。本研究ではこれら3領域の領域得点の平均を用いる。

以上の8項目から相関研究に用いられた変数は、以下の23変数である。「学生生活の充実度」(充実度)、(出席率)、「諸活動の重要度評定」から(ゼミ)、(語学)、(講義)、(サークル)、(アルバイト)の5つ。「心理的不適応得点」(不適応)、「在学に関する有用度の評定」(有用度)、「進学動機」からは、(進学・教養型)、(進学・勉学型)、(進学・学歴型)、(進学・青春型)、(進学・雷同型)の5つ。在学の理由から(在学・教養型)、(在学・勉学型)、(在学・学歴型)、(在学・青春型)、(在学・雷同型)の5つ。「18才人口における高等学校進学率」(進学率)、「大学環境認知尺度」から(実用性)、(学究性)、(共同性)の3つ。

他の変数と充実度の関係を調べるために、それぞれの充実度評定の回答毎に「非常に充実」～「全然充実していない」の5群のそれぞれの活動の重視度得点について、1元配置の分散分析を行った。さらに、「有用度評定」「心理的不適応」、大学環境認知調査の「実用性」「学究性」「共同性」についてそれぞれの平均評定値について、1元配置の分散分析を行った。主効果が得られた場合多重比較としてTukeyのt検定おこなった。このときの有意水準を.05とした。

「学生生活の充実度」と基本属性の関係を調べるため、「学部(7学部)」「学年(4学年)」「性別(男女)」「住居別(自宅・自宅外生)」「団体参加別(参加・不参加)」の5つの基本属性群間の充実度の平均に差について、調査回ごとに、「学部」と「学年」については1元配置の分散分析を、「性別」「住居別」「団体参加別」にはt検定を行った。ここでは、それぞれの調査回ごとの属性の「充実度」の差の一貫性を見るためのものなので下位検定は行わなかった

本研究の集計、統計的検定においてはSPSS社の統計パッケージSPSS 13.0 for Windowsを使用した。

### 3. 結果と考察

#### 1) 学生生活の充実度

図1は、第1回調査から13回調査までの充実度の全体平均と有用度評定の推移を示したものである。充実度だけを見ると、いくつかの山と谷が見られるが13回調査を通して右肩上がりの傾向である。この充実度得点と有意な相関が得られたのは

- 「講義の重視度 (r = .62, N=13, p<.05)」
- 「アルバイトの重視度 (r=.69, N=13, p<.01)」
- 「出席率 (r=.70, N=13,p<.01)」
- 「有用度評定 (r=.67, N=13,p<.05)」
- 「進学・学歴型 (r=.76, N=13,p<.01)」
- 「進学・青春型 (r=-.64, N=13,p<.05)」

の6つであった。充実度を学生生活における活動の総合的な評価と考えるなら、「講義とアルバイトの重視度が高い調査年度は充実度が高い。」「出席率が高く有用度評価が高い調査年度は充実度が高い」「進学の動機が学歴型である率が高いと充実度は高く、青春型が多い年度は充実度が低い」といえる。

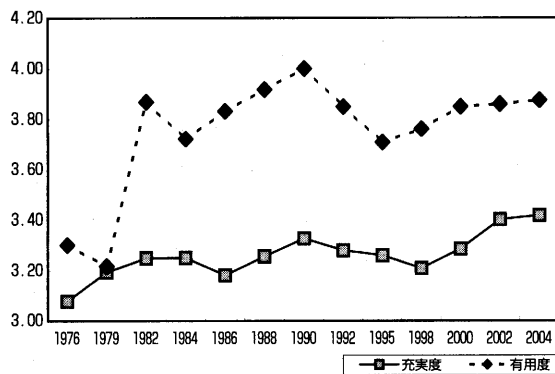


図1. 充実度と有用度評定の推移

#### 2) 正課活動への参加：登録講時と出席講時

図2は、調査回ごととの登録講時数、出席講時数の平均と出席率の平均の推移を示したものである。これらについて、第1回調査と第2回というように隣り合った

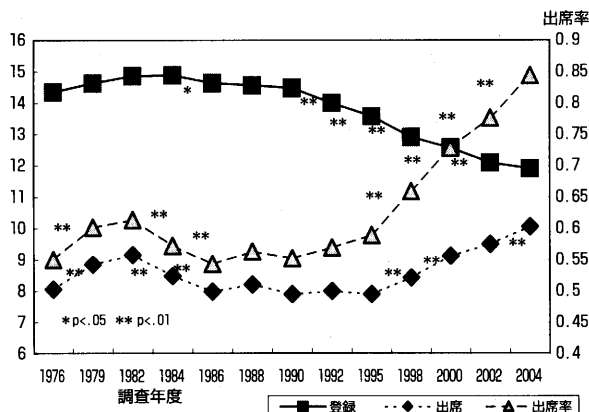


図2. 登録と出席/出席率の推移

平均値についてt検定をおこない、平均値の変化を調べた。その結果を図中にしめす。これを見ると、登録講時数は1990年度の第7回調査から一貫して減り始め、12回(2002年度)と13回(2004年度)調査で横ばいとなっている。出席講時数はやや遅れて、第9回調査(1995年度)から増え始めて13回調査まで一貫して増加してきている。これらの変化に伴って出席率は9回調査以降有意に増加している。

出席率と他の変量との関係を見ると出席率は全ての進学動機類型、と雷同型を除く在学理由類型と有意な相関を持つ。また、大学進学率、講義の重視度、環境認知では学究性型得点とも有意な相関が得られた。

- 「講義の重視度 (r = .97, N=13, p<.001)」
- 「進学・教養型 (r=-.75, N=13, p<.01)」
- 「進学・勉学型 (r=.63, N=13, p<.05)」
- 「進学・学歴型 (r=.75, N=13, p<.01)」
- 「進学・青春型 (r=-.76, N=13, p<.01)」
- 「進学・雷同型 (r=.74, N=13, p<.01)」
- 「在学・教養型 (r=-.62, N=12, p<.05)」
- 「在学・勉学型 (r=.91, N=12, p<.01)」
- 「在学・学歴型 (r=.71, N=12, p<.01)」
- 「在学・青春型 (r=-.74, N=12, p<.01)」
- 「大学進学率 (r=.85, N=13, p<.001)」
- 「学究性 (r=.92, N=13, p<.001)」

意外な事に進学・在学とも「教養型」と出席率は有意な負の相関が、「学歴型」とは正の相関が得られた。これは、出席率が高い調査回ほど「教養や視野の拡大」「立派な人格形成」という理由を、進学・在学理由としては選択する割合が小さい事になる。この事から見ると「教養型」より「学歴型」がより「勉学志向」といえる。90年以降、大学進学率は40%を超えて50%に近い水準へと推移している。この中で、短期大学より4年制大学への進学する者が増えている。「学歴型」の特長は、「就職に有利」「就職に必要な勉強をする」「将来の安定した生活」というように、「教養型」より強く就職や将来を意識している。ほぼ同世代の2人に1人近くが大学へ進学する状況と就職が厳しくなっている昨今の社会的状況では、すでに大学のブランドや大学を卒業したというだけでは就職に有利とは言えず、むしろ大学で「就職に必要な勉強をする」という選択行動が出席率との高い正の相関を示している原因と考えられる。

#### 3) 主要な活動の重要度評定

図3に諸活動の重要度評定の推移を示す。これを見ると1990年度の第7回調査において学業項目である「ゼミ」「語学」「講義」の3つの評定値が大きく落ち込んでいる。この調査回では、「重視度」をたずねているにもかかわらず、選択肢では「非常に充実」というように

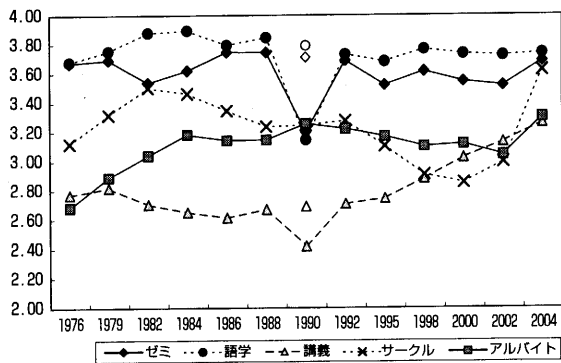


図3. 諸活動の重要度評定

「充実度」と印刷するというミスが発見された。『学生が「充実度」と取ったか「重視度」と取ったかは明らかではない。』と当該の基本報告書の総合考察で述べられていたが、13回を通じたデータを概観すると学生が「充実度」と理解して回答した可能性の方が高い事がわかる。意図しないミスからの結果ではあるが、「クラブ・サークル活動」「アルバイト」に関しては前後の6回、8回調査の値とあまり変動が見られない。この事から、学生は学業活動を「重視」はするが、その「充実度」とは必ずしも一致しておらず、自主的な選択活動である「クラブ・サークル」「アルバイト」に関しては「重視度」と「充実度」が一致していると言えよう。ここでは、第7回調査に関しては前後の値の平均を取った値で補完したデータを相関分析に用いた。

「ゼミの重視度」は、他の変量と有意な相関は見られなかった。

「語学重視度」は、

「進学・教養型 (r = .60, N=13, p<.05)」

「在学・青春型 (r = .59, N=12, p<.05)」

「共同性 (r = .67, N=13, p<.05)」\*

とは正の相関を、

「進学・雷同型 (r = -.63, N=13, p<.05)」

「在学・雷同型 (r = .62, N=12, p<.05)」

「大学進学率 (r = -.56, N=13, p<.05)」

とは負の相関を示した。

「講義の重要度」は

「進学・教養型 (r=.79, N=13, p<.01)」

「進学・勉学型 (r=.57, N=13, p<.05)」

「進学・学歴型 (r=.64, N=13, p<.05)」

「進学・青春型 (r=-.72, N=13, p<.05)」

「進学・雷同型 (r=.77, N=13, p<.01)」

「在学・勉学型 (r=.92, N=12, p<.001)」

「在学・学歴型 (r=.76, N=12, p<.01)」

「在学・青春型 (r=-.81, N=12, p<.01)」

「大学進学率 (r=.87, N=13, p<.001)」

「学究性 (r=.92, N=13, p<.01)」

と、「出席率」とほぼ同じパターンの結果が得られた。

出席率と同様の理由であろうか。

「クラブ・サークルの重視度」は唯一

「不適応得点 (r=-.632, N=12, p<.05)」と負の相関を示した。

「アルバイトの重視度」は

「在学の有用度 (r=.80, N=13, p<.01)」

「進学・学歴型 (r=.74, N=13, p<.01)」

と有意な正の相関が見られた。

#### 4) 重視している集団の種類

選択された2つの項目を、回答者数で割った選択率の13回調査の経緯を図4に示す。これを見ると1995年度の第9回調査まで第1位であった「クラブ・サークルの仲間」が第10回調査(1998年年度)に大きく落ち込んで、「家族」「出身地・出身校を同じくする仲間」に次いで3位となっている。それ以降「家族」の選択率は第13回の調査まで上がり続けているが、11回調査より「クラブ・サークルの仲間」がやや持ち直し、「出身地・出身校を同じくする仲間」と順位を入れ替えている。この1995年度以降の学校の仲間より「家族」を重視する傾向は、あるいは1995年1月の阪神淡路大震災を経験した事による地域的な現象と考えられる。しかし、「家族」の選択率について、自宅生と自宅外生との間に増加の傾向およびグループ内の選択率は差が見られない。この事から、日本の若者層全体のメンタリティの変化と捉えられるのではないだろうか。

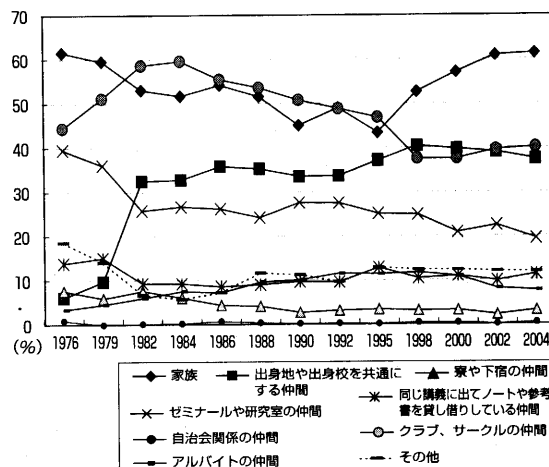


図4. 重視する関係 (2つ選択)

#### 5) 大学への進学動機：入学時と現在

5種類の選択率の推移を図5に示す。ここでは、それぞれの選択率の差が大きいため、類型別に目盛りが異なっている事に注意する必要がある。

さて、ここでの変量間の相関の意味であるがここでは第1に選択された項目の選択率を変量としている。よって「進学」間、「在学」間の相関は、ある項目の選択が

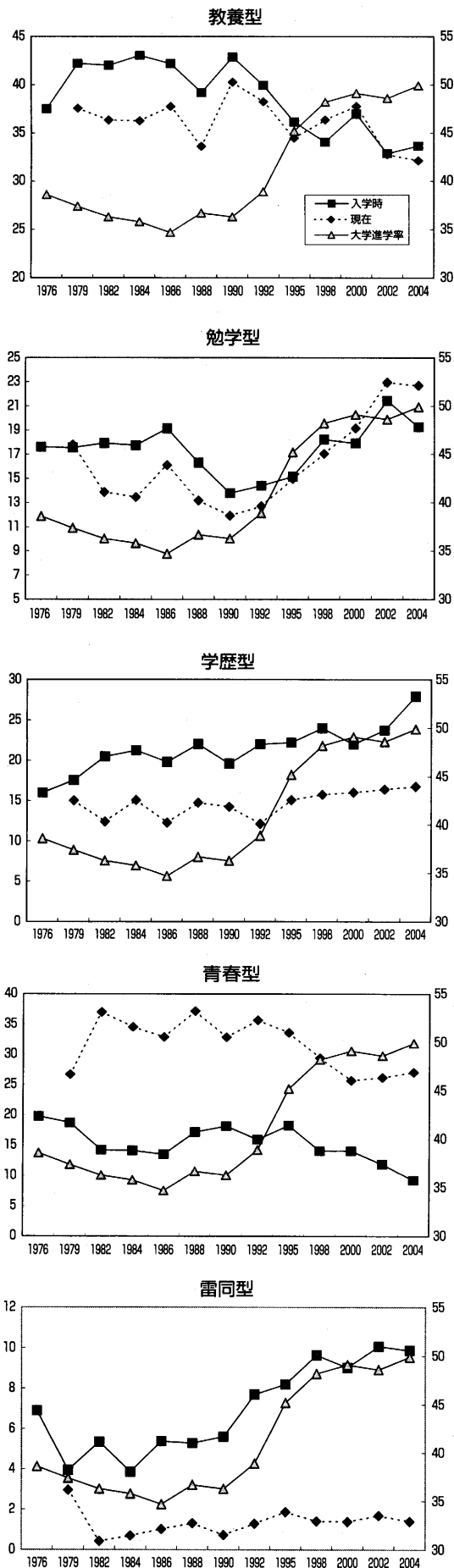


図5. 進学動機の5類型と大学進学率の変化

増えれば残りのどれかが減るという、“トレードオフ”の関係になる。また、「進学」「在学」間の相関は入学時と現在での、「進学」理由と「在学」理由の流動の関係を現すものと思われる。

このようにしてみると「進学」理由間では

「学歴型」と「雷同型」( $r=.67, N=13, p<.05$ )

の間に共変関係が、

「教養型」と「学歴型」( $r=-.63, N=13, p<.05$ )、

「教養型」と「雷同型」( $r=-.93, N=13, p<.001$ )、

「勉学型」と「青春型」( $r=-.66, N=13, p<.05$ )

「学歴型」と「青春型」( $r=-.79, N=13, p<.01$ )

の間にはトレードオフの関係がみられた。

「在学」理由間では

「学歴型」と「勉学型」( $r=.69, N=12, p<.05$ )

の間に共変関係が、

「教養型」と「勉学型」( $r=-.58, N=12, p<.05$ )、

「勉学型」と「青春型」( $r=-.86, N=12, p<.001$ )、

「学歴型」と「青春型」( $r=-.72, N=12, p<.01$ )

の間にはトレードオフの関係が見られた。

「進学」「在学」間の関係では、同じ類型同士で有意な相関が得られたのは、「教養型」( $r=.68, N=12, p<.05$ )と「学歴型」( $r=.68, N=12, p<.05$ )でいずれも正の相関である。これは図5を見ても分かるようにこの2つは他の3つの類型に比べて入学前後で選択率の差が小さい。この前後での有意な相関はこの類型の選択率の入学前後でのぶれの少なさを示すものであろう。つまり、「教養や視野の拡大」「人格形成」を目的として進学した集団と「専門知識・技術の習得」「学問研究」を目的として入学してきた学生は入学後も同じ目標を持つ率が高い事を示している。

また、「雷同型」と「学歴型」が入学後に大きく減少するのに対して、「青春型」は逆に入学後増加している。「みんなが行くから」「家族や先生の勧め」という「雷同型」や「就職に有利」「就職に必要な勉強をする」「将来の安定した暮らし」などを理由に入学してきた学生たちは「入学」ということでその目的を達成するため入学後は「青春型」へと移行していると考えられる。

他には、「進学・雷同型」と「在学・勉学型」( $r=.65, N=12, p<.05$ )には正の相関が見られ、

「進学・教養型」と「在学・勉学型」( $r=-.73, N=12, p<.01$ )

「進学・教養型」と「在学・学歴型」( $r=-.69, N=12, p<.05$ )

「進学・学歴型」と「在学・教養型」( $r=-.71, N=12, p<.05$ )、

「進学・青春型」と「在学・勉学型」( $r=-.68, N=12, p<.05$ )、

には負の相関が得られた。

[大学進学率]と有意な相関が得られたものは、

「進学・教養型」( $r=.91$ ,  $N=13$ ,  $p<.001$ )

「進学・学歴型」( $r=.70$ ,  $N=13$ ,  $p<.01$ )

「進学・雷同型」( $r=.92$ ,  $N=13$ ,  $p<.001$ )

「在学・勉学型」( $r=.77$ ,  $N=12$ ,  $p<.01$ )

「在学・学歴型」( $r=.75$ ,  $N=12$ ,  $p<.01$ )

「在学・青春型」( $r=.73$ ,  $N=12$ ,  $p<.05$ )

といずれも高い相関を示した。大学進学率が高くなると、「教養や視野の拡大」「人格形成」といった漠然とした理由での進学が減り、さらに、入学後に「青春を楽しむ」「課外活動にはげむ」事を在学の目的とする学生の割合も減る。逆に、「就職に有利」「就職に必要な勉強をする」「将来の安定した暮らし」、「みんなが行くから」「家族や先生の勧め」「特に理由はない」といった理由で進学する学生の割合は増え、入学後は、「学歴型」は減らないが「雷同型」は激減し、逆に「専門知識・技術の習得」「学問研究」を在学の理由とあげるものが増える。

ここで入学時の「雷同型」の近年の増加の傾向は大学進学率の漸増により、あまり目的意識を持たないまま、初中等教育の延長として大学に進学してきている学生がじわじわと増えており、おそらくこの調査に現れている以上に増えていると考えられる。また入学時の「青春型」の減少傾向や、「勉学型」がここ3回ほど“現在”の選択率が“入学時”の選択率を上回っている傾向は、入学後に「勉学型」へシフトする学生が増えてきていることを表し、全体的に実利的な「勉強」へシフトしてきている学生の入学・在学意識の表れであろう。

## 6) 本学在学に対する有用性評定

この有用度評価(図1)と有意な相関が得られたのは、先に述べた、「充実度」と「アルバイトの重視度」意外には、「進学・学歴型」( $r=.62$ ,  $N=13$ ,  $p<.05$ )とは正の相関を「在学・雷同型」( $r=-.78$ ,  $N=12$ ,  $p<.01$ )とは負の相関をしめた。これは、「就職に有利」「就職に必要な勉強をする」「将来の安定した暮らし」などを進学の理由にあげる学生の率が増えると「有用度」も高くなり、「なんとなく」在学する学生の動向とは逆のトレンドといえる。

## 7) 大学生活への心理的不適応

これは第2回以降に採用された項目であるが、この推移を示したものが図6である。これは点数が低いほど「不適応度」が低く、一見すると充実度と関係がありそうだが、有意な相関は得られていない。不適応得点と有意な相関が得られたのは、

「サークル重視度」( $r=-.63$ ,  $N=12$ ,  $p<.05$ )

「環境認知尺度・実用性」( $r=-.76$ ,  $N=12$ ,  $p<.01$ )

「環境認知尺度・共同性」( $r=-.77$ ,  $N=12$ ,  $p<.01$ )

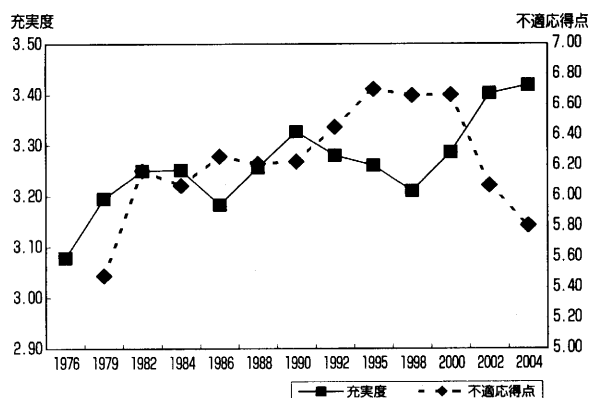


図6. 充実度と心的不適応得点の推移

といずれも負の相関関係を示している。これは、重視度評定に「非該当」が存在しなかったため、この評定値とくにサークルの重視度はクラブ・サークル活動に参加する比率が高い調査回ほど高いと考えられる。これから、サークル活動に参加する学生が多いと心理的不適応得点は低くなる。また、「実用性」は「大学環境が整っている」「学内の出来事についてはすぐ知る事が出来る」という項目に「はい」と答えた得点であり、「共同性」の内容は「学生は気軽に良く貸し借りをする」「困った時はたすけあう」という項目からなる。心理的不適応得点が高いほどこれらの評価が下がる問う事になり、わかりやすい。

## 8) 大学環境認知尺度

大学環境認知尺度(QUES)の3つの項目、「実用性」「学究性」「共同性」のそれぞれの得点の推移を図7に示す。

この中で、「学究性」他の2つに比べてかなり点数が低い。この尺度は

「重視度/講義」( $r=.80$ ,  $N=13$ ,  $p<.01$ )

「出席率」( $r=.92$ ,  $N=13$ ,  $p<.001$ )

「大学進学率」( $r=.77$ ,  $N=13$ ,  $p<.01$ )

「進学・勉学型」( $r=.69$ ,  $N=13$ ,  $p<.05$ )

「進学・学歴型」( $r=.61$ ,  $N=13$ ,  $p<.05$ )

「在学・勉学型」( $r=.87$ ,  $N=12$ ,  $p<.001$ )

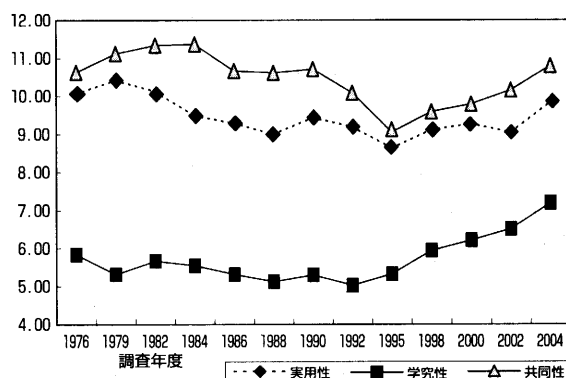


図7. 大学環境認知尺度の推移



「在学・学歴型」(r=.70, N=12, p<.05)

とそれぞれ高い正の相関を示しており、勉学指向的な行動と関連を示しており、尺度としての信頼度係数は低いがある程度妥当な尺度といえよう。

また、第8回(1992年)調査から伸び始め他の2つの尺度との差を縮めている。

### 9) 充実度を軸とした分析

各充実度群毎の諸活動の重要度評定値の平均を図8に、充実度群毎の「有用度評定値」「心的不適応得点」並びに大学環境認知尺度の領域得点の平均を図9に示す。これらについて群毎の評定値、尺度得点の差について分散分析を行った結果が表2である。「アルバイトの重視度」以外のすべての継続項目得点で有意な差が見られた。

これらの下位検定の結果、「重視度・ゼミ」では「かなり充実」群と「非常に充実」群間に差がなく、それ以外すべての組み合わせで有意な差が見られた。「重視度・語学」では、「まあまあ」「かなり」「非常に」の3群には差がなく「全然ない」群「あまりない」群とのすべての組み合わせにおいて有意な差が得られた。「重視度・クラブ/サークル」では、すべての組み合わせが有意であり、充実度と。「重視度・クラブ/サークル」にはリニアな関係が見られる。また、「有用度評定」「心的不適

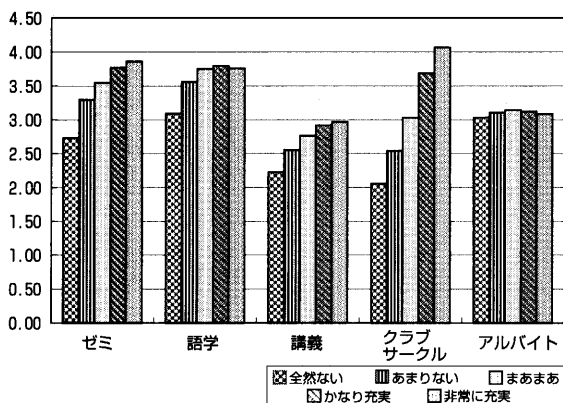


図8. 充実度群ごとの諸活動の重視度

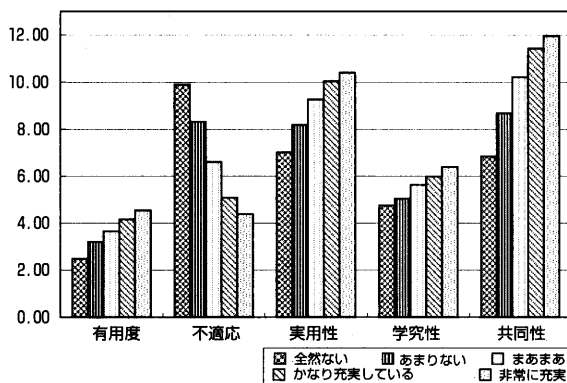
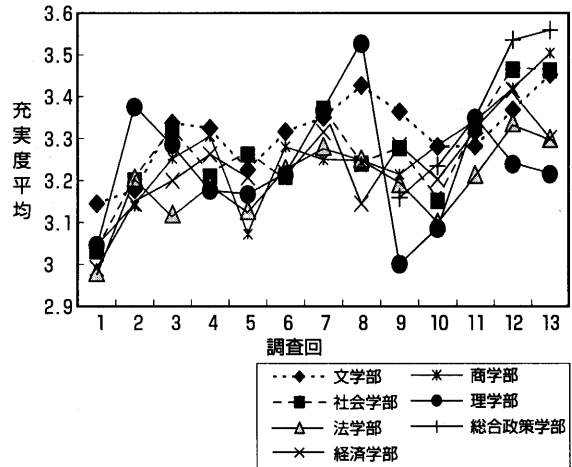
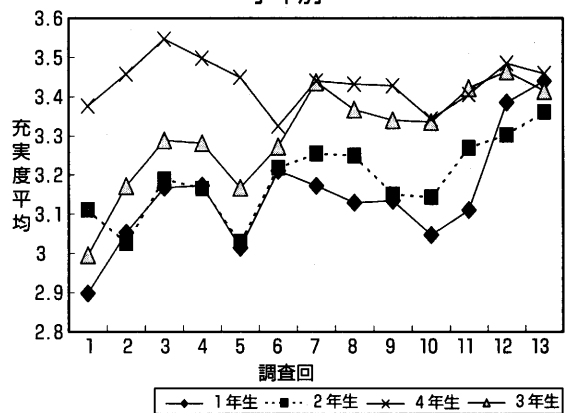


図9. 充実群ごとの各項目得点

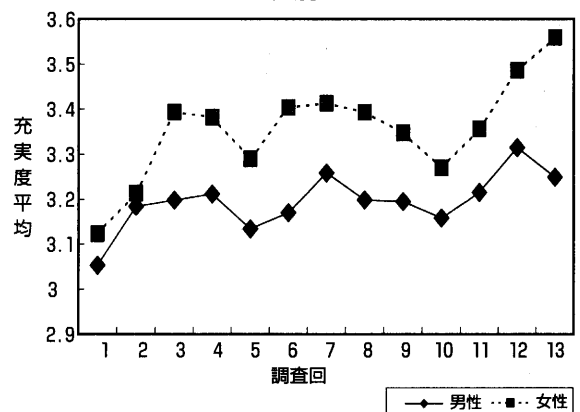
### 学部別



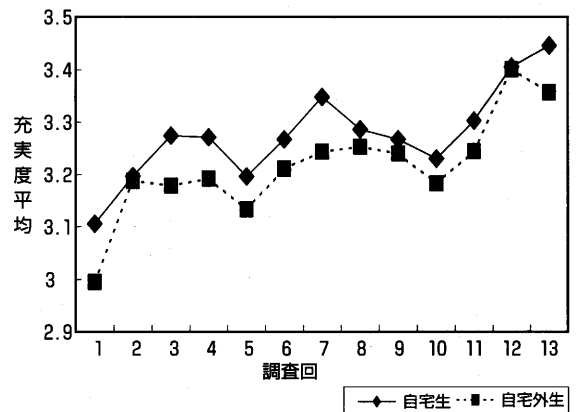
### 学年別



### 性別



### 住居別



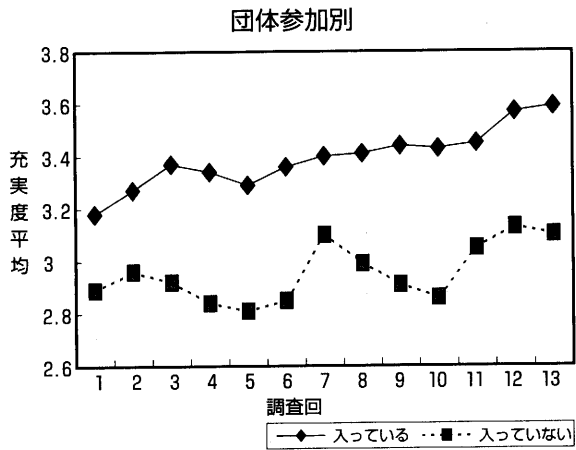


図10. 属性別の充実度の変化

応得点」に関してもすべての組み合わせで有意な差が見られた。大学認知尺度においては、「実用性」と「共同性」においては、すべての組み合わせで有意な差が見られた。「学究性」については、「全然ない」と「あまりない」群の間には差が見られなかったが、他の組み合わせではすべて有意であった。

ここで、充実度の平均の推移とこれら各評定得点の平均の推移の関係を見た相関分析では、充実度と相関関係が見られたのは「重視度・講義」と「重視度・アルバイト」「有用度」の3つであるのに対し、群毎の各評定値は「重視度・アルバイト」以外については、充実度が高い群ほどこれらの評定値も高いという結果が得られた。

10) 属性と充実度

属性別の充実度の変化を図10に示す。これらについて調査回ごとに属性群別の充実度の差を比較した結果について有意差のみを表3に示す。これを見ると、調査回を通じて団体参加者の充実度が不参加者より高いという一貫した結果が見られる。また、性別においては3回以降男性よりも女性の方が一貫して充実度が高い。学年別では11回調査までは、学年が高い方が充実度が高かったが、12、13回の調査では有意差が見られなくなっている。

表3. 属性別の充実度評定の差 (調査回数ごと)

	調査回												
	1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回	8回	9回	10回	11回	12回	13回
学部	—	—	*	—	—	—	—	**	—	—	—	—	*
学年	***	**	***	***	***	—	***	***	***	***	***	—	—
性別	—	—	**	***	**	***	***	***	**	*	**	**	***
住居別	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
団体参加別	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***	***

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

表2. 分散分析表 (充実度群毎の評定値)

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率	
ゼミ重視度	グループ間	800.80	4	200.20	160.68	0
	グループ内	19457.48	15616	1.25		
	合計	20258.28	15620			
語学重視度	グループ間	277.60	4	69.40	62.54	0
	グループ内	17586.19	15848	1.11		
	合計	17863.79	15852			
講義重視度	グループ間	412.33	4	103.08	133.75	0
	グループ内	12380.23	16063	0.77		
	合計	12792.56	16067			
クラブ・サークル重視度	グループ間	3882.58	4	970.65	543.43	0
	グループ内	27892.67	15616	1.79		
	合計	31775.25	15620			
アルバイト重視度	グループ間	8.73	4	2.18	1.69	0.15
	グループ内	20590.69	15894	1.30		
	合計	20599.42	15898			
有用度	グループ間	3201.52	4	800.38	1172.42	0
	グループ内	10971.21	16071	0.68		
	合計	14172.73	16075			
不適応得点	グループ間	26786.89	4	6696.72	994.57	0
	グループ内	100871.28	14981	6.73		
	合計	127658.17	14985			
実用性得点	グループ間	9427.66	4	2356.92	223.21	0
	グループ内	165609.91	15684	10.56		
	合計	175037.57	15688			
学究性得点	グループ間	2420.99	4	605.25	52.49	0
	グループ内	181281.47	15722	11.53		
	合計	183702.46	15726			
共同性得点	グループ間	21257.89	4	5314.47	469.86	0
	グループ内	178778.02	15806	11.31		
	合計	200035.91	15810			

4. まとめと若干の考察

以上の結果を要約すると、「充実度」は、相関分析において有意な正の有意な相関が得られたのは、「重視度・講義」「重視度・アルバイト」「出席率」「有用度」「進学動機・学歴型」であり、「進学動機・青春型」とは負の相関を得た。ここで、「出席率」は「重視度・講義」、「進学動機・学歴型」とは正の相関があり、「進学動機・青春型」とは負の相関が得られた。

「在学の有用度」に関しては、「充実度」、「重視度・ア

アルバイト]、「進学動機・学歴型」とは正の相関を、「在学・雷同型]、「環境認知・実用性」とは負の相関を示した。

一方、「心理的不適応得点」は、「重視度・サークル]「環境認知・実用性]「環境認知・共同性」と有意な負の相関を示した。

充実度群毎の分析では、重視度については「アルバイト」以外全てにおいて、群の主効果が有意であり、「ゼミ]「講義]「語学」の正課活動の重視度は「非常に充実」と「かなり充実」には差が見られないが、それ以外の組合せでは有意な差が見られ、充実度が高いほどだいたい正課活動の重視度が高いという結果を得た。「クラブ・サークル」については、全ての組合せで有意な差が得られ、3つの正課活動より線形的な関係がはっきりと見受けられた。また、相関分析では直接的な関係を示さなかった、「心理的不適応得点」は充実群毎の分析では、全ての群間に有意な差が見られ、充実度評定が高い群ほど不適応得点が低いという有意な線形関係が見いだされ、「有意度」についても、充実度評定が高い群ほど有用度評定も高いという結果になった。また、群毎の大学環境認知尺度においては、「実用性]「学究性]「共同性」のいずれにおいても、充実度評定の高い群ほどそれぞれの領域への評価が高いという結果を得た。

各調査回毎に、各属性群の充実度評定の平均を比較した結果、クラブ・サークルなどの団体に所属している群と所属していない群間で、全ての調査回において大きな差が見られた。つまり、団体に所属している者の充実度の平均が所属していない集団の平均より有意に高かった。また、性別に関しては、第3回調査以降のすべての調査で、女性の方が男性よりも充実度評定が高いという結果を得た。学年では、大体の調査回で学年が高い方が充実度評定が高いという結果を得ていたが、2002年度の12回調査からはこれらの差が見られなくなっている。

以上を総合すると、平均値の変動因として、「充実度」と「有用度」は共变的な関係が見られるが、「心理的不適応」とは共変関係が見られない。しかし、これらを充実群別に充実度評定値を比較すると、「有用度]「不適応得点」ともに線形的な関係が得られ、大学環境認知尺度の3領域に関しても同様な結果を得た。また、団体参加者の充実度が不参加者より常に高く、性別ではおおむね女性の方が男性より充実度評定が高いという結果を得た。これらの事から、団体に参加しているかどうか、つまり人間関係が密かどうかは充実度評定に影響を与えていると考えられる。また、男性より女性の方が充実感が高い理由については、さらなる分析が必要とされる。しかし、本学へ進学できるような家庭では、男性は4年生大学への進学が基本的な前提となっていると考えられる。一方女性は、短大か、4年生かという選択肢があり、その中で4年制大学を選んで入学するという積極的な意

志があり、その点で男子学生より、充実度評定が高くなっていると推測される。これらの仮説を検証するためには、男女別の進学動機や正課活動の重視度や団体参加、男女別の進学率などを含めたさらなる分析が必要である。

相関研究においては、充実度との共変関係よりむしろ大学進学・在学理由のそれぞれの類型と出席、正課活動の重視度、大学進学率、環境認知尺度等と有意な共変関係が見られた。進学動機・在学動機は特に学生の正課活動での様子や、クラブ活動、アルバイトといった正課外活動へ影響を与えると考えられる。進学動機を軸にこれらの活動の様子を説明する分析が可能であると考えられる。

## 【文献】

- Berdie F.R. 1966 College Expectations, Experience, and Perceptions, *Journal of College Student Personnel*, 336-344
- Berdie F.R. 1967 Some psychometric characteristics of CUES. *Educational and Psychological Measurement*, 27, 55-66
- Berdie F.R. 1967 A university is a many-faceted thing. *Personnel and Guidance Journal*, 768-775
- Berdie F.R. 1968 Changes in university perceptions during the first two college years. *Journal of College personnel*
- Doman F.E. & Cristensen G.M. 1976 Effects of a group life seminar on perceptions of the university environment. *Journal of College Student Personnel*, 66-71
- 遠藤悠一 1987 学生生活への心理的不適応に関する研究－第4回カレッジ・コミュニティ調査資料の再分析－, 総研論集8号, 関西学院大学総合教育研究室
- 乾原正・野田泰史・深井純 1987 学生生活の学年変化に関する研究－第3回・第4回カレッジ・コミュニティ調査資料の比較分析－, 総研論集第9号, 関西学院大学総合教育研究室
- 乾原正 1983 『自由記述』にみる学生の特質(第3回CCA調査) 総研ジャーナル33号, 2-6, 関西学院大学総合教育研究室
- 乾原正 1987 学生の視点－第5回カレッジ・コミュニティ調査－自由記述, 総研ジャーナル47号, 2-3, 関西学院大学総合教育研究室
- 関西学院大学総合教育研究室 1977 我々の大学をよりよく理解するために－カレッジ・コミュニティ調査第一次報告書, 関西学院大学総合教育研究室
- 関西学院大学総合教育研究室 1980 我々の大学をよりよく理解するために(Ⅱ)－カレッジ・コミュニティ調査第一次報告書, 関西学院大学総合教育研究室
- 関西学院大学総合教育研究室 1983 我々の大学をよりよく理解するために(Ⅲ)－カレッジ・コミュニティ調査第一次報告書, 関西学院大学総合教育研究室
- 関西学院大学総合教育研究室 1985 我々の大学をよりよく理解するために(Ⅳ)－カレッジ・コミュニティ調査第一

- 次報告書，関西学院大学総合教育研究室
- 関西学院大学総合教育研究室 1987 我々の大学をよりよく理解するために（V）－カレッジ・コミュニティ調査第一次報告書，関西学院大学総合教育研究室
- 関西学院大学総合教育研究室 1989 我々の大学をよりよく理解するために（VI）－カレッジ・コミュニティ調査第一次報告書，関西学院大学総合教育研究室
- 関西学院大学総合教育研究室 1991 我々の大学をよりよく理解するために（VII）－カレッジ・コミュニティ調査第一次報告書，関西学院大学総合教育研究室
- 関西学院大学総合教育研究室 1993 我々の大学をよりよく理解するために（VIII）－カレッジ・コミュニティ調査第一次報告書，関西学院大学総合教育研究室
- 関西学院大学総合教育研究室 1996 我々の大学をよりよく理解するために（IX）－カレッジ・コミュニティ調査第一次報告書，関西学院大学総合教育研究室
- 関西学院大学総合教育研究室 2000 我々の大学をよりよく理解するために（X）－カレッジ・コミュニティ調査第一次報告書，関西学院大学総合教育研究室
- 関西学院大学総合教育研究室 2002 我々の大学をよりよく理解するために（XI）－カレッジ・コミュニティ調査第一次報告書，関西学院大学総合教育研究室
- 関西学院大学総合教育研究室 2004 我々の大学をよりよく理解するために（XII）－カレッジ・コミュニティ調査第一次報告書，関西学院大学総合教育研究室
- 関西学院大学総合教育研究室 2006 我々の大学をよりよく理解するために（XIII）－カレッジ・コミュニティ調査第一次報告書，関西学院大学総合教育研究室
- 関西学院大学総合教育研究室 1985 学生の視点－カレッジ・コミュニティ調査自由記述（4・3年生）－，総研ジャーナル第39号，2-28，関西学院大学総合教育研究室
- 関西学院大学総合教育研究室 1985 続・学生の視点－カレッジ・コミュニティ調査自由記述（2・1年生）－，総研ジャーナル第40号，2-24，関西学院大学総合教育研究室
- 関西学院大学総合教育研究室 1987 学生の視点－第5回カレッジ・コミュニティ調査自由記述－，総研ジャーナル第47号，4-34，関西学院大学総合教育研究室
- 関西学院大学総合教育研究室 1989 学生の視点，総研ジャーナル第54号，9-40，関西学院大学総合教育研究室
- 関西学院大学総合教育研究室 1991 学生の視点，総研ジャーナル第60号，1-61，関西学院大学総合教育研究室
- 関西学院大学総合教育研究室 1993 学生の視点，総研ジャーナル第63号，1-54，関西学院大学総合教育研究室
- 佐々木薫・辻村徳治 1980 学生生活の充実感に関する研究－第1回カレッジ・コミュニティ調査資料の再分析－，総研論集第3号，関西学院大学総合教育研究室
- 佐々木薫・野田泰史・深井純 1983 学生生活の学年変化に関する研究－第1回・第2回カレッジ・コミュニティ調査資料の比較分析－，総研論集第4号，関西学院大学総合教育研究室
- 谷田薫 2001 カレッジ・コミュニティ調査の20年，総研ジャーナル，第79号，1-12

## 【参考】

戦後教育改革の流れ／教育基本法資料室／文部科学省  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/kihon/data/d002.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/data/d002.pdf)

付表 1. 調査回ごとの回収者属性

	F1 所属学部											F2 学年			F3 性別		F6 クラブ活動参加状況		住居形態		合計
	種	文	社	法	経	商	理	総政	1年生	2年生	3年生	4年生	男性	女性	参加	不参加	自宅生	自宅外生			
																			度数	パーセント	
1	20	283	129	101	105	96	137	0	275	147	232	217	553	318	567	297	656	208	864		
		32.49	14.81	11.60	12.06	11.02	15.73	0.00	31.57	16.88	26.64	24.91	63.49	36.51	65.63	34.38	75.93	24.07	100		
2	2	118	120	97	76	79	32	0	132	115	122	155	332	192	389	133	412	112	524		
		22.52	22.90	18.51	14.50	15.08	6.11	0.00	25.19	21.95	23.28	29.58	63.36	36.64	74.52	25.48	78.63	21.37	100		
3	4	323	224	267	280	277	56	0	358	364	298	212	1037	389	1067	390	1094	359	1453		
		22.57	15.65	18.66	19.57	19.36	3.91	0.00	29.06	29.55	24.19	17.21	72.72	27.28	73.23	26.77	75.29	24.71	100		
4	6	398	263	320	324	323	74	0	497	471	399	329	1217	479	1437	323	1344	417	1761		
		23.30	15.40	18.74	18.97	18.91	4.33	0.00	29.30	27.77	23.53	19.40	71.76	28.24	81.65	18.35	76.32	23.68	100		
5	7	293	187	250	215	195	48	0	276	271	301	347	818	377	924	268	946	248	1194		
		24.52	15.65	20.92	17.99	16.32	4.02	0.00	23.10	22.68	25.19	29.04	68.45	31.55	77.52	22.48	79.23	20.77	100		
6	8	283	215	214	207	189	47	0	299	302	272	290	736	427	924	239	944	219	1163		
		24.33	18.49	18.40	17.80	16.25	4.04	0.00	25.71	25.97	23.39	24.94	63.28	36.72	79.45	20.55	81.17	18.83	100		
7	10	313	258	239	265	270	62	0	391	343	305	379	847	570	1057	353	1080	337	1417		
		22.09	18.21	16.87	18.70	19.05	4.38	0.00	27.57	24.19	21.51	26.73	59.77	40.23	74.96	25.04	76.22	23.78	100		
8	6	323	216	218	245	231	38	0	383	316	285	294	732	546	894	383	944	329	1273		
		25.29	16.91	17.07	19.19	18.09	2.98	0.00	29.97	24.73	22.30	23.00	57.28	42.72	70.01	29.99	74.16	25.84	100		
9	12	363	281	290	278	312	62	48	478	372	398	398	946	700	1087	556	1086	558	1644		
		22.05	17.07	17.62	16.89	18.96	3.77	2.92	29.04	22.60	24.18	24.18	57.47	42.53	66.16	33.84	66.06	33.94	100		
10	11	312	226	241	222	240	47	143	387	374	344	338	763	680	886	554	942	497	1439		
		21.64	15.67	16.71	15.40	16.64	3.26	9.92	26.82	25.92	23.84	23.42	52.88	47.12	61.53	38.47	65.46	34.54	100		
11	5	299	241	216	169	219	44	119	379	357	266	310	644	668	765	544	912	398	1310		
		22.79	18.37	16.46	12.88	16.69	3.35	9.07	28.89	27.21	20.27	23.63	49.09	50.91	58.44	41.56	69.62	30.38	100		
12	5	256	211	178	156	203	70	118	380	295	246	276	581	616	745	446	848	348	1196		
		21.39	17.63	14.87	13.03	16.96	5.85	9.86	31.75	24.64	20.55	23.06	48.54	51.46	62.55	37.45	70.90	29.10	100		
13	8	216	175	154	127	131	71	135	286	258	237	236	459	558	654	358	698	319	1017		
		21.24	17.21	15.14	12.49	12.88	6.98	13.27	28.12	25.37	23.30	23.21	45.13	54.87	64.62	35.38	68.63	31.37	100		
合計	104	3780	2746	2785	2669	2765	788	563	4521	3985	3705	3781	9665	6520	11396	4844	11906	4349	16255		
		23.33	16.95	17.19	16.48	17.07	4.86	3.48	28.27	24.92	23.17	23.64	59.72	40.28	70.17	29.83	73.25	26.75	100		

付表2. 調査回ごとの各評定値平均

		Q1学生 生活の充 実度	諸活動の重視度評定					心理的不 適応得点	在学の有 用度評定	
			ゼミナ ール活動	語学の授業	普通の講義	クラブ・ サークル	アルバイト			
調 査 回	1	平均値	3.08	3.67	3.68	2.77	3.12	2.68	3.30	
		度数	864	819	849	860	838	854	863	
		標準偏差	0.82	1.09	0.95	0.81	1.28	1.11	0.87	
		2	平均値	3.19	3.69	3.75	2.82	3.32	2.89	5.48
		度数	524	500	505	520	504	518	507	522
		標準偏差	0.80	1.06	0.99	0.90	1.31	1.11	2.78	0.88
		3	平均値	3.25	3.54	3.88	2.70	3.50	3.04	6.17
		度数	1457	1417	1447	1456	1448	1454	1394	1450
		標準偏差	0.87	1.15	0.99	0.86	1.30	1.14	2.88	0.86
		4	平均値	3.25	3.62	3.90	2.65	3.46	3.18	6.07
		度数	1762	1712	1738	1762	1750	1758	1723	1754
		標準偏差	0.88	1.17	1.06	0.84	1.32	1.14	2.84	0.86
		5	平均値	3.18	3.75	3.79	2.61	3.35	3.14	6.26
		度数	1192	1179	1182	1194	1188	1194	1167	1188
		標準偏差	0.88	1.12	1.04	0.86	1.40	1.14	2.90	0.94
	6	平均値	3.26	3.74	3.85	2.67	3.24	3.15	6.21	
	度数	1162	1145	1141	1159	1154	1161	1117	1163	
	標準偏差	0.88	1.13	1.04	0.87	1.39	1.13	2.91	0.95	
	7	平均値	3.33	3.20	3.15	2.42	3.25	3.26	6.23	
	度数	1409	1388	1392	1418	1379	1413	1405	1417	
	標準偏差	0.90	1.15	1.07	0.89	1.43	1.09	2.87	0.90	
	8	平均値	3.28	3.69	3.73	2.71	3.28	3.22	6.46	
	度数	1263	1271	1276	1277	1271	1279	1270	1279	
	標準偏差	0.94	1.06	1.04	0.87	1.42	1.12	2.97	0.96	
	9	平均値	3.26	3.52	3.68	2.74	3.10	3.17	6.70	
	度数	1621	1622	1636	1644	1628	1643	1628	1643	
	標準偏差	0.96	1.17	1.09	0.92	1.49	1.15	2.93	1.00	
	10	平均値	3.21	3.61	3.76	2.88	2.91	3.10	6.66	
	度数	1428	1415	1436	1437	1422	1438	1436	1441	
	標準偏差	0.96	1.10	1.05	0.89	1.47	1.15	3.08	0.96	
	11	平均値	3.29	3.55	3.73	3.02	2.85	3.12	6.67	
	度数	1286	1291	1309	1307	1296	1312	1304	1311	
	標準偏差	0.93	1.17	1.05	0.87	1.55	1.16	2.94	0.92	
	12	平均値	3.40	3.52	3.72	3.13	2.99	3.04	6.07	
	度数	1175	1177	1194	1195	1183	1195	1187	1198	
	標準偏差	0.92	1.17	1.06	0.83	1.51	1.16	2.82	0.94	
	13	平均値	3.42	3.68	3.74	3.26	3.62	3.30	5.81	
	度数	996	834	904	997	707	835	1012	1013	
	標準偏差	0.90	1.05	1.04	0.84	1.26	1.04	2.82	0.91	
	合計	平均値	3.27	3.58	3.72	2.78	3.22	3.12	6.29	
	度数	16139	15770	16009	16226	15768	16054	15150	16242	
	標準偏差	0.91	1.14	1.06	0.89	1.43	1.14	2.92	0.94	

付表3. 登録と出席、出席率の推移

		登録数			出席数			出席率		
		度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差
調査 年 度	1976	868	14.35	4.34	871	8.06	5.54	855	55.05%	0.32
	1979	523	14.63	3.39	524	8.86	4.81	522	60.19%	0.28
	1982	1447	14.87	2.55	1449	9.16	4.10	1445	61.37%	0.25
	1984	1751	14.89	2.79	1757	8.49	4.11	1750	57.26%	0.33
	1986	1180	14.64	3.22	1182	7.99	4.43	1175	54.35%	0.27
	1988	1139	14.57	2.95	1142	8.21	4.29	1135	56.35%	0.27
	1990	1411	14.48	3.28	1412	7.90	4.23	1408	55.27%	0.34
	1992	1260	14.01	3.56	1263	8.00	4.39	1252	56.97%	0.26
	1995	1620	13.58	4.31	1625	7.90	4.53	1617	58.95%	0.28
	1998	1427	12.91	4.00	1428	8.43	4.42	1426	65.93%	0.27
	2000	1271	12.57	4.35	1275	9.13	4.60	1263	72.81%	0.26
	2002	1176	12.09	4.28	1177	9.50	4.67	1170	77.65%	0.24
	2004	997	11.91	4.60	1001	10.06	4.76	993	84.40%	0.22
	合計	16070	13.82	3.82	16106	8.55	4.53	16011	62.48%	0.29

\* &lt; .05    \*\* &lt; .01

付表4. 進学/在学動機、5類型の選択率

調査 年度	調査回		入学理由類型					合計	在学理由類型					合計	大学 進学率
			教養型	勉学型	学歴型	青春型	雷同型		教養型	勉学型	学歴型	青春型	雷同型		
1976	1	度数 %	218 37.5	102 17.6	93 16	115 19.8	40 6.9	581 100	— —	— —	— —	— —	— —	— —	38.6
1979	2	度数 %	214 42.21	89 17.55	89 17.55	95 18.74	20 3.94	507 100	190 37.55	90 17.79	76 15.02	135 26.68	15 2.96	506 100	37.4
1982	3	度数 %	605 42.01	258 17.92	295 20.49	205 14.24	77 5.35	1440 100	519 36.34	198 13.87	177 12.39	528 36.97	6 0.42	1428 100	36.3
1984	4	度数 %	747 43.03	308 17.74	369 21.26	245 14.11	67 3.86	1736 100	628 36.26	233 13.45	261 15.07	598 34.53	12 0.69	1732 100	35.8
1986	5	度数 %	494 42.19	224 19.13	232 19.81	158 13.49	63 5.38	1171 100	443 37.73	189 16.10	144 12.27	386 32.88	12 1.02	1174 100	34.7
1988	6	度数 %	445 39.21	185 16.30	250 22.03	195 17.18	60 5.29	1135 100	383 33.63	150 13.17	168 14.75	423 37.14	15 1.32	1139 100	36.7
1990	7	度数 %	588 42.86	189 13.78	269 19.61	249 18.15	77 5.61	1372 100	554 40.26	164 11.92	196 14.24	452 32.85	10 0.73	1376 100	36.3
1992	8	度数 %	488 39.93	176 14.40	269 22.01	195 15.96	94 7.69	1222 100	473 38.24	157 12.69	150 12.13	441 35.65	16 1.29	1237 100	38.9
1995	9	度数 %	577 36.13	242 15.15	355 22.23	292 18.28	131 8.20	1597 100	553 34.48	240 14.96	242 15.09	539 33.60	30 1.87	1604 100	45.2
1998	10	度数 %	477 34.07	255 18.21	336 24.00	197 14.07	135 9.64	1400 100	514 36.35	241 17.04	223 15.77	416 29.42	20 1.41	1414 100	48.2
2000	11	度数 %	475 36.96	230 17.90	283 22.02	181 14.09	116 9.03	1285 100	487 37.75	247 19.15	207 16.05	331 25.66	18 1.40	1290 100	49.1
2002	12	度数 %	385 32.88	251 21.43	278 23.74	139 11.87	118 10.08	1171 100	387 32.77	271 22.95	194 16.43	309 26.16	20 1.69	1181 100	48.6
2004	13	度数 %	334 33.67	191 19.25	277 27.92	92 9.27	98 9.88	992 100	320 32.13	226 22.69	167 16.77	269 27.01	14 1.41	996 100	49.9
	合計	度数 %	6473 40.73	2713 17.07	3379 21.26	2263 14.24	1063 6.69	15891 100	5451 36.15	2406 15.96	2205 14.62	4827 32.02	188 1.25	15077 100	